

【フォーラム】

使役を表す「受動文」

島山 雄二 本田 謙介 田中 江扶

東京農工大学

茨城高専

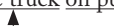
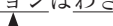
信州大学

【要旨】 本稿では、動作主指向副詞「わざと」を含む例文から、日本語の受動文が使役の意味を表す場合があることを示す。また、日本語の受動文と英語の get 受動文には、どちらも受動と使役の両方の意味が表せるという点において、強力な類似性があることも示す*。

キーワード：受動, 使役, 動作主指向副詞, get受動

1. はじめに

影山 (2009) は、受動文における動作主指向副詞「on purpose / わざと」の解釈に関して、日英語には興味深い違いが見られると指摘している (影山 2006 も参照)。

- (1) John was hit by the truck on purpose.

- (2) ジョンはわざとトラックに追突された。


英語は、(1) の矢印で示されているように、on purpose が by 句にある the truck を修飾する。つまり、(1) は「トラック (の運転手) が意図的にジョンに追突した」という解釈になる。一方、日本語では、(2) の矢印で示されているように、「わざと」が主語の「ジョン」を修飾する。つまり、(2) は「ジョンは自ら意図的にトラックにぶつかった」という解釈になる。このように、日英語では、受動文において動作主指向副詞が修飾する対象が異なっている。影山 (2009: 78) は、(2) はたとえばジョンが「保険金をとるために自らぶつかった」という解釈を表すということも指摘している。

上で見た影山による (2) の観察およびその解釈は、一般に受動形態素とよばれている「られ」の本質を探る上で重要な手がかりを提供してくれるだけでなく、日英語比較の観点からも大変示唆に富むものと考えられる。影山は (2) を受動文の延長線上で捉え、厳密な議論によって (1) と (2) の違いを明らかにしている。このこと自体は尊重すべきことである。しかし、(2) を単なる受動文と考えてよいか、

*『言語研究』の査読者より、本稿の構成や内容に関し、貴重なコメントを頂くことができた。厚く御礼申し上げたい。本稿に残されているであろう不備や誤りは、すべて著者の責任である。なお、執筆者の順番はアルファベット順である。

(1) と (2) をパラレルに扱ってもよいかについては、議論の余地が大いにあるように思われる。影山が (2) を受動文の延長線上に捉えた理由は、おそらく (2) に「られ」が使われているからだと思われる。しかしながら、「られ」が使われている文だからといって、ア priori に受動の意味をもつ文と判断してしまってもよいのだろうか。本稿では、(2) は《受動文の形式をとっているが使役の意味をもつ文》と考える。このことについては次節以降詳しく議論するが、本稿の流れを先に示しておくで概略 (3) のようになる。

- (3) a. (2) の「られ」は受動の意味ではなく使役の意味をもつ。(第2節)
 b. 「られ」の意味を決定するのは主語の動作主性であり、その動作主性は副詞(「わざと」等)によって決まる。(第3節)
 c. 日本語の (2) に対応する英語の文は、(1) のような be を使った受動文ではなく、get を使った受動文である。(第4節)

(3) で示された本稿の主張が正しいとすると、そこから理論上重要な帰結が生まれる。第5節でその帰結と今後の課題を示すことにする。

このように本稿は、(2) を《受動文の形式をとっているが使役の意味をもつ文》として捉えた場合について議論するものである。

2. 受動形態素「られ」

本稿でとくに注目したいのは (2) の解釈である。通常、自らすすんでトラックにぶつかるといふ状況はあまり考えられないかもしれない。しかし、影山 (2009: 78) が指摘するように、(2) はたとえばジョンが「保険金をとるために自らぶつかった」という意味でとることも可能である。この解釈では、(2) の主語の「ジョン」は自ら意志をもってトラックにぶつかるといふ行為を引き起こしていることになる。影山でも指摘されているように、動作主の特徴として行為や出来事を制御 (control) できることがあげられることから、(2) の主語の「ジョン」は動作主といえる。しかし、もし (2) が受動文であるならば、受動文の主語は一般に動作主 (Agent) ではなく被動作主 (Patient) であるため、主語の「ジョン」が動作主であることと矛盾することになる。

さらに、(2) は本質的な意味を変えないで、(4) のように主語の再帰形(「自分」)を用いて使役文に書き換えることができる。

- (4) ジョンはわざとトラックに自分を追突させた。

(4) の使役文においても「ジョン」は、自分をトラックにぶつけるという行為を制御できるため、動作主であるといえる。つまり、(2) の受動文の主語の「ジョン」と (4) の使役文の主語の「ジョン」は動作主という点で同じである。このことから、(2) は「られ」を含んでいるが、使役文であると考えることができる。この考え方が正しいとすると、受動形態素とよばれている「られ」には使役の意味を表す場合

があるということになる。この可能性は、以下に見るように経験的な根拠をもつ。

Washio (1993, 1995) は多言語の比較研究の結果から、受動と使役が同一形式で表される場合が多く観察されることを指摘している。たとえば、モンゴル語 (= (5)) とその日本語訳 (= (6)) を見てみよう。

- (5) Gerel Dorjoor xüügee magtuulav.
 Gerel Dorj-INS son-REF praise-CAUSE-PAST (Washio 1995: 149)
- (6) ゲレルがドルジに息子を {褒められた・褒めさせた}。

(6) に示されているように、(5) は受動文としても使役文としても解釈できる。これら2種類の解釈を生み出しているのは同一形式の接辞 *-uul-* である¹。この例から、モンゴル語には受動と使役を同一形式で表せる接辞があるということがわかる。同様の例がフランス語や韓国語などにもあることが Washio (1993, 1995) で報告されている。

このように、「複数の言語で受動と使役が同一形式で表される」という Washio の観察を考慮に入れると、「られ」が受動も使役も表すという本分析の可能性は十分に考えられる。つまり、(2) の例は「られ」が使役の意味で使われている例ということができる。

(2) の受動文が使役の意味をもつメカニズムは次の第3節で詳細に述べるが、本稿の主張をインフォーマルにまとめると、(2) は副詞の「わざと」によって主語の「ジョン」が動作主になると使役の解釈になる²。これに対して、次の(7)のように「不運にも」という副詞によって主語の「ジョン」が被動作主になると受動の解釈になる。

- (7) ジョンは**不運にも**トラックに追突された。 《受動の意味》

つまり、「られ」は主語が動作主であると使役の意味になり、主語が被動作主であると受動の意味になる。

このように考えると、「わざと」も「不運にも」も伴わない次の(8)は、潜在的には受動文にも使役文にもなりうる曖昧文となる。

- (8) ジョンはトラックに追突された。

次節では、受動文が使役の意味を表す場合（以下、「受動－使役交替」）のメカニズ

¹ モンゴル語の *-uul-* は、Washio (1995) によると、本来使役の接辞として使われる。これに対して、日本語の「られ」は本来受動の接辞として使われる。このことについては第5節で詳しく議論する。

² 副詞の「わざと」について、仁田 (1991) は、「主体めあて」の副詞であり、「わざと」を含む能動文とそれに対応する受身文（仁田のいう「まどもの受身文」）では、真偽値に異なりが生じると指摘している。たとえば、(ia) と (ib) では真偽値が異なっている。

- (i) a. 警察はデモ隊の一人にわざと殴りつけた。
 b. デモ隊の一人が警察にわざと殴りつけられた。

(仁田 1991: 40 (原文はカタカナ書き))

ムについて見ていく。

3. 受動－使役交替のメカニズム

日本語の受動文の研究の中で比較的広く受け入れられている理論に、均一理論 (uniform theory) がある (Howard and Niyekawa-Howard 1976, 長谷川 1990, Washio 1989-90 など参照)。均一理論では、日本語の受動文は、直接受動や間接受動にかかわらず、概略 (9) のような埋め込み構造を基底構造にもつと仮定されている³。

(9) [s 主文主語 [s 補文主語 ... 動詞] られる]

また、日本語では、使役文も概略 (10) のような埋め込み構造を基底構造にもつと仮定されている (Shibatani 1973, 1976)。

(10) [s 主文主語 [s 補文主語 ... 動詞] させる]

第2節で見たように、「られ」は使役と受動のどちらも表せる文法形式である。ただし、「られ」が使役の意味をもつ場合の統語構造と「られ」が受動の意味をもつ場合の統語構造はそれぞれ異なっている。まず、「られ」が使役の意味をもつ場合の統語構造を考えてみよう。

上で見たように、動作主指向副詞の「わざと」が使われている (2) は、再帰形の「自分」を用いた (4) の使役文で書き換えられる ((2) と (4) を再掲する)。

(2) ジョンはわざとトラックに追突された。

(4) ジョンはわざとトラックに自分を追突させた。

(2) と (4) の意味的な類似性を考えると、(2) の統語構造は (11) のようになると考えられる⁴。

³ここでは日本語の受動文が埋め込み構造をとっていることを示すのが目的であるので、埋め込み文の範疇の特定 (S, IP, VP, vP など) に関する議論はしない。Kuroda (1979) は、受身文を二受身文とニヨッテ受身文に分類し、二受身文のみ複文構造をとると主張している。本稿で扱う使役の意味をもつ受身文はすべて二受身文であるので、埋め込み構造をとっていることになる。なお、日本語の受動文の先行研究については、金水 (1993), Hoshi (1999), 三原・平岩 (2006) など詳しくまとめられている。

⁴査読者から、(11) の「ジョン」は動作主であると同時に、「追突される」という受動事象を被る被動作主でもあるという趣旨のコメントをいただいた。しかし、これに対して筆者らは「ジョン」が担っている意味役割は動作主だけで、被動作主の意味役割は pro が担っていると回答した。この筆者らの回答を受けて、同じ査読者からさらに、「『られ』が使役の意味をある程度もつとしても、pro が被動作主の意味役割を担っているからには、受身の意味がまったくないとはいえないのではないか」とのコメントをいただいた。筆者らは (2) は使役の意味をもつ文としかとれないが、査読者は「受身の意味がまったくないとはいえない」と判断している。この「受身か使役か」についての筆者らと査読者の判断の違いはおそらく、被動作主の意味役割をもつ音形のない pro に重きを置くかどうか、すなわち pro がもつ被動作主の意味役割をどこまで意識するかの違いにあると思われる。このような pro についての意識の

(11) [s ジョン_i はわざと [s トラックに pro_i 追突さ] れた] (= (2))

(12) [s ジョン_i はわざと [s トラックに 自分_i を 追突さ] せた] (= (4))

(11) は文全体として使役の意味になり、かつ、(12) の使役文の「自分」に対応する pro が使われている。このように、「られ」が使役の意味をもつ場合には埋め込み文中に pro を含む構造をもつと仮定する。

次に、「られ」が受動の意味をもつ場合の統語構造を考えてみよう。副詞の「不運にも」が使われている (7) は受動の意味をもつため、その統語構造は (13) であると仮定する。

(13) [s ジョン_i は不運にも [s トラックに 追突さ] れた]

(13) で示されているように、主節の主語の「ジョン」は、(7) の埋め込み文から主節に移動したものである。

ここで使役の意味をもつ「られ」文と受動の意味をもつ「られ」文の統語構造を並べて示してみよう⁵。

(11) [s ジョン_i はわざと [s トラックに pro_i 追突さ] れた] 《使役の意味》

(13) [s ジョン_i は不運にも [s トラックに 追突さ] れた] 《受動の意味》

(11) と (13) にあるように、「られ」文には2種類の統語構造がある。(11) のような使役の意味を表す「られ」文の場合には、主節の主語には動作主が要求される。一方、(13) のような受動の意味を表す「られ」文の場合には、主節の主語には被動作主が要求される。そのため、(11) の主節主語に被動作主がきたり、(13) の主節主語に動作主がきたりすることはない。

上で見てきた受動-使役交替のメカニズムの要点は、下の (14) のようにまとめられる。なお、日本語の「られ」にはこれまで見たように受動の意味と使役の意味がある。このため、「られ」を含む文を「受動文」のように受動に特化したよび方にはせずに、便宜上「ラレル文」とよぶことにする。

(14) a. ラレル文は [s 主文主語 [s 補文主語 ... 動詞] られる] のような埋め込み構造をしている。

b. 「られ」は受動と使役のどちらの意味も表せる文法形式である。

違いと文の意味の捉え方の違いとの間に相関関係があるとする、音形のない pro のもつ意味役割をどうみるかという点をめぐって、未知の、そして非常に興味深い研究領域が広がっている可能性があると思われる。この可能性については、稿を改めて議論していきたい。

⁵ 査読者から「(2) の受身の構造が (13) と異なり、(11) のようになるのは、副詞によってもたらされるのか」という質問をいただいた。この質問の意図しているところが「副詞が直接的なトリガーになって (13) の構造がもたらされるのか」ということであれば、筆者らの回答は「それは正しくない」ということになる。副詞が直接影響を及ぼす対象はあくまで主語であって、文構造ではない。動作主指向副詞「わざと」によって主語が動作主性をもつことが促され、動作主性をもつ主語が、そのような主語を許容する構文に現れる、というのが本稿の意図している大まかな流れである。

- c. 主文主語が動作主である場合には「られ」に対して使役の意味が選択され、主文主語が被動作主である場合には「られ」に対して受動の意味が選択される。

(14) は、受動－使役交替のメカニズムの要点を簡潔にまとめたものだが、とくに(14c)が重要である⁶。ラレル文の統語構造は(11)と(13)があるが、主文主語が動作主である場合には使役の構造(= (11))を選択するしかない。そうでなければ主語の意味役割に関して齟齬が生じてしまう。また、主文主語が被動作主である場合には受動の構造(= (13))を選択するしかない。そうでなければ主語の意味役割に関して齟齬が生じてしまう。つまり、主文主語が動作主であるか被動作主であるかによって、ラレル文の統語構造が決まってしまうということになる。(14)をさらに表にまとめると(15)のようになる。

(15)	主文主語の動作主性	「られ」の意味	例文
	+動作主	使役	(2)
	-動作主 (=被動作主)	受動	(7)

本節の議論を踏まえ、次の第4節では英語の受動文と日本語のラレル文の比較を試みる。

4. 英語の受動文と日本語のラレル文

まず、英語の「be + 動詞の過去分詞」からなる受動文(= be 受動文)を見てみよう。

- (16) John was hit by the truck. (cf. ジョンはトラックに追突された。)
 (17) *John was hit his car by the truck. (cf. ジョンはトラックに彼の車を追突された。)

よく知られているように、英語の be 受動文では(16)のような直接受動文は可能であるが、(17)のような間接受動文は不可能である。しかし、(17)の be 受動文が表そうとしていた内容は、(18)のような「get + 目的語 + 動詞の過去分詞」(= get 受動文)によって伝えることができる⁷。

- (18) John got his car hit by the truck. (cf. (17))

get 受動文の統語構造に関しては、Haegeman (1985) などでは埋め込み構造が假定

⁶ 査読者から「どのような場合に主文主語が動作主になるのかということをも明記する必要がある」とのコメントをいただいた。本稿で指摘した動作主指向副詞「わざと」以外の要素によって、主文主語が動作主になる可能性は十分にありえる。しかしながら、「主文主語が動作主になる条件」を示すことは、受動や使役を扱うすべての研究に関わることであり、本稿の紙幅の制限を大幅に超えることになるため、今後の研究課題としたい。

⁷ (18)のような get 受動文については、Lakoff (1971), Haegeman (1985), Givón and Yang (1994), Reed (2011) などですく詳しく述べられている。

されており、その枠組みに従えば (18) の構造は (19) のようになる⁸。

(19) [s John got [s his car hit by the truck]] (= (18))

ここで注意すべきことは、(18) の get 受動文には「ジョンはトラックに彼の車を追突された」という受動の意味になる場合だけでなく、「ジョンはトラックに彼の車を追突させた」という使役の意味になる場合もあるということである（なお、Lakoff (1971) にこれに関連する議論がある）。get 受動文は、(20) のように動作主指向副詞（deliberately や on purpose など）を伴うと使役の意味が出る。一方、(21) のように動作主指向ではない accidentally のような副詞を伴うと受動の意味が出る。

(20) [s John deliberately got [s his car hit by the truck]] 《使役の意味》

(21) [s John accidentally got [s his car hit by the truck]] 《受動の意味》

このように、get 受動文も受動-使役交替を許し、そのメカニズムは (22) のようにまとめられる⁹。

- (22) a. get 受動文は [s 主文主語 get [s 補文主語 ... 動詞の過去分詞]] のような埋め込み構造をしている。
 b. get は受動と使役のどちらの意味も表せる文法形式である。
 c. 主文主語が動作主である場合には get に対して使役の意味が選択され、主文主語が被動作主である場合には get に対して受動の意味が選択される。

(22) をさらに表にまとめると (23) のようになる。

(23)

主文主語の動作主性	get の意味	例文
+ 動作主	使役	(20)
- 動作主 (= 被動作主)	受動	(21)

ここで、日本語のラレル文の議論から得られた (14) と (15) をもう一度見てみよう。

- (14) a. ラレル文は [s 主文主語 [s 補文主語 ... 動詞] られる] のような埋め込み構造をしている。

⁸ Haegeman (1985) が仮定している埋め込み文の範疇は小節 (small clause, SC) であるが、ここでの議論は範疇名を問題としていないので便宜上 S としている。

⁹ 査読者から、get 受動と同様のことが (i) のような間接関与構文の have についてもいえると指摘を受けた。

- (i) John had his hair cut by the barber.

(i) においても受身の意味（「ジョンが床屋に髪を切られた」）と使役の意味（「ジョンが床屋に髪を切らせた」）の両方の意味がある。

- b. 「られ」は受動と使役のどちらの意味も表せる文法形式である。
 c. 主文主語が動作主である場合には「られ」に対して使役の意味が選択され、主文主語が被動作主である場合には「られ」に対して受動の意味が選択される。

(15)

主文主語の動作主性	「られ」の意味	例文
+動作主	使役	(2)
-動作主 (=被動作主)	受動	(7)

(22) と (23) をそれぞれ (14) と (15) と比べてみよう。そうすると、日本語のラレル文と英語の get 受動文はともに (i) 複文構造をもち、(ii) 受動-使役交替を許すという類似性があることがわかる¹⁰。さらに、「主文主語の動作主性と get/「られ」の意味の関係」が同じということもわかる。

本節を終える前に、日本語の (2) に対応する英語について考察しておく。上で述べたように、日本語の受動文と英語の get 受動文は類似性を示す ((13) と (21) を参照)。このことから、(2) は (24) のような get 受動文に対応すると考えられる¹¹。

(24) John purposely got (himself) hit by the truck. (cf. (2))

(24) において、動作主指向副詞の purposely によって修飾された主語の John は動作主となる。また、get 受動文は再帰形の himself を用いて使役の意味を表すことも可能である。このように、英語の (24) は日本語の (2) と同じく、動作主指向副詞が主語を修飾でき、再帰形を用いた使役の意味も表すことから、(24) が (2) に対応すると結論付けられる。

5. 理論的帰結と今後の課題

本稿では、「複数の言語で受動と使役が同一形式で表される」という Washio (1993, 1995) の観察に基づき、日本語の「られ」も受動と使役の意味を担う同一の形式だと主張した。ここで注意しなければならないのは、Washio は受動と使役の間に非対称性を認めているということである。たとえば、第 2 節で挙げたモンゴル語の例をもう一度見てみよう。

¹⁰ 日本語の受動文と英語の get 受動文が類似しているという指摘は、古くは Lakoff (1971) で、比較的最近では鷲尾 (2005, 2010) で独立した理由に基づきなされている。

¹¹ Givón and Yang (1994: 144-145) で指摘されているように、get 受動文の歴史的発達において再帰形 (reflexive) が含まれていた段階があった。たとえば She got admitted という文は (i) のような歴史的変遷を経て成立したと報告されている。

(i) She got herself to be admitted. > She got to be admitted. > She got admitted.

- (5) Gerel Dorjoor xüügee magtuulav.
 Gerel Dorj-INS son-REF praise-CAUSE-PAST (Washio 1995: 149)
- (6) ゲレルがドルジに息子を [褒められた・褒めさせた]。

(6) に示されているように、(5) は受動文としても使役文としても解釈できる。第2節でも述べたように、これら2種類の解釈を生み出しているのは同一形式の接辞 -uul- である。この -uul- であるが、Washio によるともともとは使役の接辞であったという。つまり (5) は使役接辞 -uul- による使役文ということである。このことからモンゴル語の場合、使役文が受動の意味をもつということがわかる。このように使役文が受動の意味をもつ事例は、フランス語や韓国語など言語の系統や類型とは無関係に観察されるため、普遍性の高い現象だと Washio は主張している。本稿で議論した「られ」受動文で起こっていることは、モンゴル語などの《使役→受動》の逆パターン、つまり《受動→使役》である。このことから、日本語の「られ」の例が Washio のいう非対称性仮説に対する1つの例外と考えることができる¹²。

本稿では、日本語のラレル文の主語が「わざと」のような動作主指向副詞に修飾されると動作主となり、その結果「られ」が使役の意味を表すことになることと主張した。また、日本語のラレル文の主語は「不運にも」のような動作主指向ではない副詞に修飾されると被動作主となり、その結果「られ」が受動の意味を表すことになることと主張した。

実は、同様の現象が「させ」による使役文にも見られる。次の例文を見てみよう。

- (25) ジョンは彼女を泣かせた。
- (26) ジョンはわざと彼女を泣かせた。 《使役の意味》
- (27) ジョンは不運にも彼女を泣かせた。 《受動の意味》

(26) のように「わざと」が使われると主語「ジョン」は動作主になる。この場合、(26) は使役の意味を表す文として解釈される。これに対して、(27) のように「不運にも」が使われると主語「ジョン」は動作主ではなく被動作主という読みが強く

¹² しかし、一方で、この点に関してまったく別の考え方もできる。それは、「られ」の起源が使役を表す他動詞であったという可能性である。鷺尾 (2005) は「受動表現の類型と起源について」という論文の中で、石田 (1958) の学説を踏襲して日本語の受動接辞の起源を「得」と主張した。

(i) 「得」説 → GET 構文であるとの主張 (鷺尾 2005: 17)

現代語の「(ら)れ」は「(ら)る」から「(ら)ゆ」まで文献上遡ることができる。さらに「ゆ」の起源を「得」と主張したのが石田 (1958) である。ここで重要なのは「得」が他動詞だということである。つまり、「得」には、使役文の主語になりうるような、動作主性の高い主語がくるということである。現代語の「られ」に動作主性の高い主語を許す選択肢があるのは、もしかすると「られ」の起源と関係があるかもしれない。「られ」の起源をめぐっての議論は、本稿の範囲から大きく逸脱してしまうためこれ以上議論しないが、今後の重要な研究課題になることをここで指摘しておきたい。なお、「られ」に関する通時的な研究は、川村 (2012) で極めて詳細になされている。

なる。この場合、(27)は「(不運にも)彼女に泣かれた」という受動の意味で解釈することができる。このことから、「させ」は使役の意味だけでなく受動の意味も表しうることがわかる¹³。つまり、(27)が受動の意味をもつ仕組みは次のようになる。「(27)の主語「ジョン」が「不運にも」によって動作主でなくなる(=被動作主になる)→「させ」のもつ《使役》と《受動》の選択肢のうち《受動》が選ばれる」→「(27)が受動の意味を表す使役文として解釈される」。

従来、受動形式の「られ」と使役形式の「させ」は、(28)で示されているように、いわば「分業」していると考えられてきた。

(28)

受動	使役
られ	させ

しかし、ここでの議論を踏まえると、次の(29)で示されているように「られ」と「させ」は「相互に乗り入れ可能」だといえる。

(29)

受動	使役	
られ	→	主語が[+動作主]のとき《使役》になる
←	させ	主語が[-動作主]のとき《受動》になる

「られ」と「させ」がどの程度「相互に乗り入れ可能」で、その際にどのような条件が課せられるのかという点については、今後の研究課題とする。

6. おわりに

英語の受動文では(30)のように動作主指向副詞(on purpose)が主語を修飾できないのに対して、日本語の受動文(=ラレル文)では(31)のように動作主指向副詞(「わざと」)が主語を修飾できる。

(30) John was hit by the truck on purpose.

(31) ジョンはわざとトラックに追突された。

本稿では、日本語のラレル文において、動作主指向副詞「わざと」が主語を修飾し、その結果主語が動作主の意味役割をもつ場合、「られ」のもつ受動と使役の選択肢

¹³ 使役文が受動文の意味をもつ場合があることは、早津(2016)で指摘されている。早津は(i)のような一般化を提出している。

(i) 受身と似通う使役文は、主語(使役主体)に消極的ではあれ引きおこし手性がうかがえる事態を表している。(早津 2016: 294)

早津のいう「引きおこし手性」と本稿の動作主性との関連性は、稿を改めて検討したい。

のうち、使役が選ばれると主張した（詳しくは第3節を参照）。本分析が正しいとすると、日本語においても受動-使役交替が起こっていることになる。本分析の妥当性は今後、現代日本語の受動文についてももちろんのこと、古典語の受動文や、さらには多言語の受動文の調査からも検証される必要がある。

参 照 文 献

- Givón, Talmy and Lynne Yang (1994) The rise of the English *get*-passive. In: Barbara A. Fox and Paul J. Hopper (eds.) *Voice: Form and function*, 119–149. Amsterdam: John Benjamins.
- Haegeman, Liliane (1985) The *get*-passive and Burzio's generalization. *Lingua* 66: 53–77.
- 長谷川信子 (1990) 「原理とパラメータのアプローチにおける受動構文」日本認知科学会 (編) 『認知科学の発展 2』89–107. 東京: 講談社.
- 早津恵美子 (2016) 『現代日本語の使役文』東京: ひつじ書房.
- Hoshi, Hiroto (1999) Passives. In: Natsuko Tsujimura (ed.) *The handbook of Japanese linguistics*, 191–235. Malden: Blackwell Publishing.
- Howard, Irwin and Niyekawa Howard (1976) Passivization. In: Masayoshi Shibatani (ed.) *Syntax and semantics 5: Japanese generative grammar*, 201–237. New York: Academic Press.
- 石田春昭 (1958) 「動詞未然形の性格」『国文学』20: 44–58. 関西大学国文学会.
- 影山太郎 (2006) 「日本語受身文の統語構造—モジュール形態論からのアプローチ—」影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No. 2』179–231. 東京: ひつじ書房.
- 影山太郎 (2009) 第II部 動詞と形容詞 第3章 出来事を表す受身」影山太郎 (編) 『日英比較 形容詞・副詞の意味と構文』78–119. 東京: 大修館書店.
- 川村大 (2012) 『ラル形述語文の研究』東京: くろしお出版.
- 金水敏 (1993) 「受動文の固有・非固有性について」近代語学会 (編) 『近代語研究 第九集』473–508. 東京: 武蔵野書院.
- Kuroda, Shige-Yuki (1979) On Japanese passives. In: George Bedell, Eichi Kobayashi, and Masatake Muraki (eds.) *Explorations in linguistics: Papers in honor of Kazuko Inoue*, 305–347. Tokyo: Kenkyusha.
- Lakoff, Robin (1971) Passive resistance. *Papers from the regional meeting of the Chicago Linguistic Society* 7: 149–162.
- 三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造』東京: 松柏社.
- 仁田義雄 (1991) 「ヴォイスの表現と自己制御性」仁田義雄 (編) 『日本語のヴォイスと他動性』31–57. 東京: くろしお出版.
- Reed, Lisa (2011) *Get*-passives. *The Linguistic Review* 28: 41–78.
- Shibatani, Masayoshi (1973) Semantics of Japanese causation. *Foundations of Language* 9: 327–373.
- Shibatani, Masayoshi (1976) The grammar of causative constructions: A conspectus. In: Masayoshi Shibatani (ed.) *Syntax and semantics 6: The grammar of causative constructions*, 1–40. New York: Academic Press.
- Washio, Ryuichi (1989–90) The Japanese passive. *The Linguistic Review* 6: 227–263.
- Washio, Ryuichi (1993) When causatives mean passive: A cross-linguistic perspective. *Journal of East Asian Linguistics* 2: 45–90.
- Washio, Ryuichi (1995) *Interpreting voice, a case study in lexical semantics*. Tokyo: Kaitakusha.
- 鷲尾龍一 (2005) 「受動表現の類型と起源について」『日本語文法』5(2): 3–20.
- 鷲尾龍一 (2010) 「ヴォイスの意味」澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座 1 語・文と文法カテゴリーの意味』113–131. 東京: ひつじ書房.

執筆者連絡先:

畠山 雄二

〒184-8588 東京都小金井市中町 2-24-16

[受領日 2017年3月30日

最終原稿受理日 2018年4月3日]

東京農工大学

hatayu@cc.tuat.ac.jp

本田 謙介

〒 312-8508 茨城県ひたちなか市中根 866

茨城高専

dzb12452@nifty.ne.jp

田中 江扶

〒 380-8544 長野県長野市西長野 6- 口

信州大学

kout@shinshu-u.ac.jp

Abstract

When Passives Mean Causative: The Role of the Agent-Oriented Adverb *Wazato*

YUJI HATAKEYAMA

*Tokyo University of Agriculture
and Technology*

KENSUKE HONDA

*National Institute of
Technology, Ibaraki College*

KOSUKE TANAKA

Shinshu University

This paper points out that Japanese passive sentences can be interpreted as causative, especially when they include the agent-oriented adverb like *wazato* 'on purpose'. It is, furthermore, shown that there are strong similarities between Japanese passives and English *get*-passives in that they can be interpreted as both passive and causative.